

## 耳馴雀

### 蓮師の慈訓

御一代聞書に云く

「一。前々住上人仰せられ候。神にも仏にも馴れては手ですべき事を足にてするぞ、と仰せられける。如来聖人善知識にも馴れ申すほど御心安く思うなり、馴れ申すほど彌いよいよ渴仰いよいよの心を深く運ぶべき事尤なる由仰せられ候。」

「二。前々住上人『おどろかす甲斐こそなけれ村雀、耳なれぬれば鳴子にぞのる』此の歌を御引きありて折々仰せられ候、『たゞ人は皆耳馴雀なり』と仰せられしと云々。」

これは、求道途上にある我らへの厳しいみ教である。誠に心から頂戴すべきみ教である。大いなる喜びと、驚きとを持つてみ法の世界に登場した人も、その中には、いづれへか姿を消し、若々しく成長していたものも、その中には、しん芯がとまつてしまうのは何故であろう。「たゞ人は皆耳馴雀」になつてしまふが故である。

## 耳馴雀

「なれる」ということに二つの意味がある。「馴」という字は「馬順也」(説文)と訓じられて、馬の柔順になることである。随つてよい意味に使われる場合は、たとえば、善行といふことを「馴行」というが如く、人は幾度も幾度も同一の善事を行いなれることによつて、はじめて善行が出来るのであるが故に、善行のことを馴行というのである。この場合は、善き習慣ということであろう。習慣の慣の字は「ならひ」という字である。この善い意味でのなれるということは、「慣ひ」といふことである。「習慣は第二の天性」という所まで慣い馴れることである。

然るに「なれる」ことを表わした文字に「狎」と「狎」とがある。どちらも、猷篇で、犬をならす義である。この文字を使つての熟字を出しますと「狎見」といえば、見なれて人をあなどることである。たとえば違つた御講師が来れば、非常な沢山な人が集るが、如何に御高德御高僧でも、度々来られると狎れて集まらない。これを狎見と云うのである。又狎恩と綴れば、恩をきすぎて、恩になれ、恩を恩とも思はぬことである。

又、狎という字は、民をあなどることを狎民といい、悪い家来を狎臣といい、人を馬鹿にすることを、狎弄といい、礼儀を乱りて邪なことを狎邪と言われる。であるから、狎れるという字は、近づけば、近づくだけ、軽んじたはむれることである。

耳馴雀とは実に、この近づくことによつて、いよいよ馴れて恩を忘れ、見なれ聞なれてひゞかず、あなどり軽んずる意である。誠に恐るべき、衆生の邪見悪性を現わされた文字である。

## 空恐しき事

「一。前々住上人仰せられ候『仏法の上には毎事に付いて空恐しき事と存じ候べく候。たゞ方に付いて油断あるまじき事と存じ候へ』の由折々に仰せられ候ふと云々。」(御一代聞書)

悪いことをしながらどうしてもやめられない、何時かは曝露する、空恐ろしいことである。

御恩の中にいつつ、御恩を忘れていくこと、空恐ろしいことである。日本国に生れて、日本国の御恩に狎れ忘れていく。ロシヤ等は人が五人おれば、一人は、ゲ・ペ・ウの密偵であつて、今や国を挙げて牢獄だそうである。支部を見ても、何処を見ても、日本国に生れて、み法を聞かされた程の幸はない。尊い皇国の大恩である。その御恩になれて私利私欲のみに走ることは、空恐ろしいことである。

折角、仏法を聞きつつ、耳なれ雀になつて、何とも思わぬ、空恐ろしいことである。平気になればなるだけ空恐ろしいことである。

仏法が嫌になつたものは、仏法者には遠ざかり、仏法者でない人、そして悪い人には近づきたくなる。近づけば必ず駟れる。空恐ろしいことである。

「悪しき者に近づけばそれには駟れじと思へども悪事よりよりになり、たゞ仏法者には駟れ近づくべき由仰せられ候、俗典にいはいはく『人の善悪は近づき習ふによる』とまた『その人を知らんと思はゞその友を見よ』といへり、『善人の敵とはなるとも悪人を友とすることなかれ』といふ事あり。」(御一代聞書)

幾度頂いても有難い、誠に至言といふべきである。善に駟れるか、悪に駟れるか、善知識に駟れるか、悪知識に駟れるか、人はその駟れる処によつてその運命を定め2る。

## 渴仰の心

「……………神にも仏にも駟れては、手ですべきことを足にてするぞ」

考えて見れば、誠にその通りである。来しかたを考えれば、することなすことが、なれになれて手ですべきことを足でし、手で言うべきことを足で言い、手で聞くべきことを足で聞き、道ならぬ相済まぬことばかりである。

「如来聖人善知識にも駟れ申すほど御心安く思うなり。」

それは当然のことである。駟れるほど心安くなつてこそ、そこに親しみも出来、いらぬ心配気兼ねもいらなくなり、み法もよく耳に入ることではある。しかし、そのなれるということが、狎れなれしくなつて、手ですることを足でするに至れば、なれるということとは恐るべきこととなる。であるから

「駟れ申すほど彌渴仰の心を深く運ぶべき事尤なる由仰せられ候。」

と教えたまうのである。渴仰とは、渴とは咽のかわくこと、渴したるものが水を求めるほど、仰ぎしたうことである。駟ればなれるほど渴仰の心を持つことは、それは唯真実信心の世界においてのみである。

## 煩惱の世界

貪欲は、必ず狎れる。初め遠慮や気兼ねから礼儀正しくしたのも、なれては手でしたことを足でし始め、善いことを始めても途中でやめる。

貪欲は、何時も、今はつまらぬ、ここはつまらぬ、何時か、何処かに、すばらしいことはないかと、珍しいことを探し求めて、珍しいものもやがては捨てて返り見ない。この食欲の世界には、永久に尊きものもなく、仰ぐべきものもない。今の涙があてにもならず、今の信心や、歓喜も、何時なくなるかわかったものではない。今は尊敬しているようでも、お氣に入らねば、掌を返したように、悪口を言いつつ敵にでもなる。であるから、貪欲で固めた自力の信心が嫌われるのである。初もの食いで珍しいものを追うてゆく人に、なればなれるほど、渴仰の心を増すというこのあるうはずがない。み法を聞きつつも、耳馴雀となるのは、自力の心、貪欲がものをいうが故である。

### 信心の智慧

聾つんばであつたならば、耳もとで大砲の音がしても何ともないであろう。盲めくらは蛇におぢず。耳や眼のないことは悲しくも恐ろしいことである。

我らの歩む道すぢに、そこにもここにも、見のがしてはならぬこと、聞きのがしてはならぬことが、一ぱいに出してあつても、盲であるが為に、それが見えず、聾である為に、それが聞えぬ。

初めは見えたはずの文字、聖語も、後には、そこを幾百千度通つても見えなくなり、何ともなくなる、渴仰の思い等のあろうはずがない。

「大聖易往とときたまう 浄土をうたがふ衆生をば

無眼人とぞなづけたる 無耳人とぞのべたまう」(和讃)

疑いが晴れぬ晴れぬとて疑っている者ならまだしも、聞いたはず、信じたはずになつたままで、無眼人無耳人がいはすまいか。この見える風をした盲こそ、一番悲しい姿である。

渴仰のこころのない信心、渴仰のこころのない念仏。耳馴れすゝめが、煩惱のことに聞き耳を立て、世の雑音に恐入つて走りまわる。

信心は智慧である。智慧とは内に開く眼であり、耳である。大法は、この眼を開き、この耳をつけて下さる。大法によつて開いた耳だけが大法に驚き、如来によつて授かつた眼だけが、如来を拝する。聞くにつれてみ法はいよいよ有難く、度重なるにつれていよいよ、今まで何を聞いていたであろうかと、み法の尊さにあきれる。馴れるに随つて驚きをます、信心の智慧をたまわるからである。

信心の智慧は、馴れてますます渴仰の心、楽欲の心をおこすが故に、世の雑音に遠ざかり、一貫相續して一生を貫く。自力貪欲は、馴れて飽き、馴れて軽んじ、大法を大法とも思はぬに至つて、遂に大法を捨てて、生死の大海にのまれる。

朝夕三十分乃至一時間の勤行の時間が無意味に思われ、貪欲の満足に使われる半日は有意義に考えられる。その心を一家に拡大すれば、一家無宗教となり、一村に拡大すれば一村無宗教となり、一国に拡大すれば一国無宗教となる。無宗教の世界は、永遠の闇である。

一人に燃える信心の智慧の尊い哉。

### 仏法の大器

「一。一つことを聞きていつも珍らしく初めたるように信の上にはあるべきなり。たゞ珍らしきことを聞きたく思うなり。一つことを幾度聴聞申すとも珍らしく、はじめたるようにあるべきなり。」（御一代聞書）

「若し常に尊法を信奉せば、則ち仏法を聞くに厭足無けん。若し仏法を聞くに厭足無ければ、彼の人、法の不思議を信ぜん。」（信巻引用華嚴經）

一句の法文に一生耳を傾け、一人の聖人の御化導に一生厭足なし。咀嚼そしゃくしていよいよ法味限りなきを知り、度重つていよいよ法味の微妙を知る。知ったとして棄ててかえり見なかつた聖典の一句一句を、拾つてこれをおし頂き、これを更に五読十読百読すれば、かつて知らぬ如来の深き願意を知る。一つことを初めたるように珍しく聞く一人の人、この人は必ず世の光となり、道の先達となり、遂に仏法の大器となる。